

ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES



ブラジル特報

No.1682
2024年9月号

あの町この町
ノーヴァ・ペトロポリス Nova Petrópolis

特集 日本のサンバ

- ・浅草サンバカーニバル小史
- ・バランサのサンバ～その歴史をDENが振り返る

新規会員募集中!

詳しくは協会へお問合せください。



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人: 大前孝雄/編集人: 岸和田仁

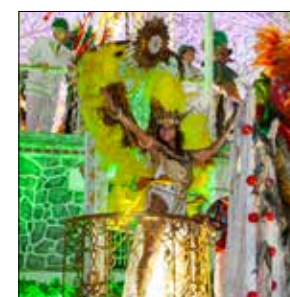
0円

鉄とともに、人とともに。 私たちのSDGs

ふとまわりを見れば、社会は鉄でできたものにあふれています。様々なものづくりで暮らしを便利に快適にしたり、災害に備えインフラをより強く安全に変えたり、豊富な資源と高いリサイクル性で環境負荷を軽減したり…鉄はこれからも、人と地球の未来をささえる無くてはならない素材です。だからこそ、日本製鉄は鉄を進化させ続け、皆さまと力を合わせて持続可能な社会づくりに取り組んでいきたい。私たちのSDGsに、終わりはありません。

目次

あの町この町 ノーヴァ・ペトロポリス [高嶋尚生]	3
ブラジル・ナウ 拡大BRICS、インドのブラジルへの期待 中・口抑制で共同歩調は？ [松野哲朗]	5
【特集】日本のサンバ 浅草サンバカーニバル小史 [星野清久]	6
【特集】日本のサンバ パランサのサンバ～その歴史を DEN が振り返る [DEN]	8
ネポムセノの大傑作「交響曲第1番」を指揮してみようこと (2024年5月7日、ラ・フォル・ジュルネTOKYOにて) [木許裕介]	10
ブラジル現地報告 ユーチューバー Gutti&Ellie 夫妻、 ブラジル探索の旅は続く [コッペひろみ]	12
新刊書紹介	13
連載・ブラジルあれこれ ポルトガルで広まるブラジルのポルトガル語	13
連載・ビジネス法務の肝 インフレ調整及び利息に関する最近の法改正及び裁判例 [柏 健吾]	14
連載・勤どころ～税務&ホットトピック～ サードパーティに起因するESGリスクの マネジメントと企業責任における課題 [天野義仁／佐々木健文／Honda, Kin]	15
エッセイ 浮力の国ブラジル [布施直佐]	16
パリ五輪～ブラジル選手の活躍	17
キャンパス・コラム 私のブラジルとの出会い [加藤七海]	17
連載・文化評論 追悼：版画家ジョゼ・フランシスコ・ボルジェス (1935～2024) 「ブラジルの棟方志功」のローカルを越えた普遍的魅力 [岸和田仁]	18



写真＝永武ひかる
「表紙のひとこと」
「全身に響くサンバ、躍動するリズムと肉体、華々しい衣装。美の競演たるやりオのカーニバル。パレードに連なる大きな山車にも目が釘づけに。創意工夫に満ちたデザインに仕掛け、壮大なテーマを語る動く大舞台。まさに「百聞は一見にしかず」」
永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に写真絵本「世界のともだち3 ブラジル」(偕成社)等。www.hikarunphoto.com

ノーヴァ・ペトロポリス Nova Petrópolis

コーヒー、サンバ、カーニバルと言った典型的なブラジルのイメージからかけ離れた小さな市が南部リオグランデ・ド・スル州(RS州)に存在する。ノーヴァ・ペトロポリスである。州都ポルト・アレグレから北へ90km(クルマで1時間20分)のところに位置する。セーハ・ガウシャと呼ばれる南部の高原、標高700mの町である。まず本稿に挿入した金髪の子供たちの写真をご覧いただきたいが、彼らは外国人ではなく全員ブラジル人、地元のドイツ移民の子供たちである。ブラジルへのドイツ移民は1824年に南部RS州のサン・レオポルドから始まり、本年で200周年を迎えるが、ノーヴァ・ペトロポリスへの移民は1858年から始まった。既に170年近くの歴史があり、現在、人口約2万人の90%がドイツ移民の子孫である。今でもドイツ語を話す住人が多い。街の中心に移民村公園がある。ここで典型的なドイツ料理から当時の伝統的な木骨造りの建物までゲルマン文化について学ぶことができる。ところで、今から30年ほど前、この公園の奥にひっそりと相撲の土俵があった。それは、ノーヴァ・ペトロポリスに移住した1世の方が造ったものであった。筆者は1990年代のポルト・アレグレ駐在時代にその方を訪ねたことがあったが、当時、ブラジル人も参加した相撲大会も開催しているとのことだった。こんな山



の中にも日伯友好の絆があると感じた記憶がある(その後、土俵は撤去されたが、RS州の相撲選手権は現在も続いていて、昨年5月に第61回としてポルト・アレグレ近郊のエステイオで開催されている)。ノーヴァ・ペトロポリスはセーハ・ガウシャの庭園とも呼ばれ、市の中心のフローレス広場では色鮮やかな季節の植物と花壇が常にその美しさを保っている。特にクリスマスのころの紫陽花は人々を魅了する。こうした自然及び移民が残した歴史・文化遺産が組み合わさって、年間を通じて様々なイベントが開催されている。「セーハ・ガウシャの庭園の夏」、「フェスティマーリャ(ニットウエア見本市)」、「国際民俗フェスティバル」、「春祭り」、「オクトーバーフェスト(10月のビール祭り)」、「セーハ・ガウシャ庭園のクリスマス」などである。これから春に向かい、あっという間に夏のクリスマスという幸せな季節を迎える。ノーヴァ・ペトロポリスも今年4月末からブラジル南部を襲った大洪水で大きな被害を被った。今後、復興が進み、一日も早く市民が笑顔で当たり前の日常生活を取り戻せるよう心よりお祈りしたい。



高嶋尚生(協会監事)

広島から Tudo Bem?

総会で役目確認、懇親会で笑顔も 文化面でも活動を活性化

広島日伯協会は7月1日、市内ホテルで理事会及び総会を開き、昨年度の事業・会計報告、本年度の事業・予算計画を発表、承認された。

田中秀和会長は冒頭、「コロナで数年しっかりした事業も行えなかったが、これからしっかりと広島とブラジルをつなぎ、在広ブラジル人への支援を行っていきたい」と力強く語り、協会の役目を改めて確認した。

本年度はブラジル在住の映像作家の作品上映会を開催するなど文化面での活動も行っていく。なお2025年1月にはブラジル日系学校の生徒たちの大型訪問団も受け入れ交流も図る。

総会後には、ブラジルに訪問歴のある県会議員らも参加した

懇親会が開かれた。長年協会活動に関わった人たちのひさしぶりの参加もあり、それぞれのテーブルは大いに賑わっていた。

▲総会の様子

「写真結婚」を語る ブラジル文化センター村上副会長夫妻

一度も婚前に会わず、写真と文通などで結婚を決めるいわゆる「写真結婚」で結ばれ、サンパウロに約60年住む村上佳和・ことじ夫妻が帰国のおり、市内カフェでトークイベントを行った。結婚の経緯や移住当時の生活などを振り返り、約40人の参加者は熱心に耳を傾けていた。

冒頭、堀江剛史当会理事がブラジルへの日本人移住の歴史を解説、「移民県広島」の深い関わりを振り返った。

1941年生まれの村上佳和さんは60年にブラジルに単身移住、農業、塗装業、販売業、飲食業な様々な職業で奮闘した。ことじさんは県庁の職員の紹介で佳和さんと文通を始め、夫不在の祝言をあげ、66年に移民船に乗り込んだ。

到着後、船上での夫婦初の会話は「初めまして。夫の佳和です」「あ、妻のことじです」だったという。

紆余曲折あったブラジルでの生活の様子や結婚58年を迎え

た夫婦円満の秘訣など、ふたりの掛け合いに会場は終始和やかな雰囲気に包まれていた。

地元紙で告知があったこともあり、二人の同級生も駆けつけ、期せずして同窓会ともなった。村上夫妻は「色々あったけどブラジルに行ってよかった。こうして故郷にも帰れて幸せです」と満面の笑みを浮かべていた。



▲いつも元気で笑顔を絶やさない村上夫妻

ブラジルフエスタ開催！ 中国地方各地からの訪問も

「ブラジルの人＆音＆モノたちに囲まれる一日」と題し、ブラジル雑貨や食、音楽などを楽しむイベントが6月、市内イベントスペースで開かれた。

食材や雑貨、美容商品などを売るブースには人だかりができ、音楽スペースでは、ボサノバやバゴージなどが演奏され、さながらブラジルの街角の雰囲気を醸し出していた。終盤には、会場を巻き込んだダンスパーティとなり多くの笑顔がはじけた。イベントを企画した山戸邦子さんは「島根や山口からも来てくれた人もいる。喜んでもらえよかった。これからも定期的に開催していきたい」と喜んだ。

会場を訪れ、カイピリーニャも楽しんだ伊集院健さんは「ほんとにみんな明るいし元気ですね～」と目を白黒させながら、「いつか行ってみたい国の一つになりました」と話していた。



▲会場で参加者らが記念撮影



広島日伯協会

ブラジルと広島の交流を推進するため1969年に創立。在広島ブラジル人との多文化共生社会を支援し、ブラジル広島文化センター（県人会）と県、市ほか関係市町村と連携を取りながら活動している。法人会員75、個人会員80。田中秀和会長（6代目、2020～）は、在広島ブラジル連邦共和国名誉領事。



拡大BRICS、中・ロ抑制で共同歩調は？ インドのブラジルへの期待

2024年10月下旬にBRICS首脳会議がロシアで開催される。イラン、アラブ首長国連邦（UAE）、エジプトなどが加わった拡大BRICS初の首脳会議となる。これまで過半を占めていた民主主義国家が一気に少数派となり、ブラジルの国際社会での立ち位置を懸念する声も強い。

ブラジル外交が中国・ロシア寄りになっているとの見方に拍車をかけたのは、ウクライナ問題への対応かもしれない。中国は5月、ブラジルとともに独自の和平案を提示した。ロシアが招かれなかった6月のウクライナ平和サミット（開催国スイス）に中国は参加せず、ブラジルも駐スイス大使のオブザーバー参加にとどめた。サミットの共同声明に署名した拡大BRICS加盟国はなかったが、民主主義国家であるインドや南アフリカからは閣僚級や元閣僚が参加している。

本コラムでは、BRICSでのブラジルの振る舞いを考察するため、経済成長著しいインドの思惑を取り上げる。

民主主義と多元性の共有

インドのシンクタンク「途上国研究情報システム（RIS）」のサチン・チャトゥルベディ所長（中銀理事）は、インドとブラジル、南アの民主主義以外の共通点として、「平和を愛する多元的な社会であること」をあげる。ブラジルと共有する懸念としては、不平等、貧困、生物多様性を指摘する。

BRICSの決定は総意に基づく。同所長によると、BRICSには説き伏せる側に回るメンバーやその手助けをするメンバーがいるが、「他のメンバーからの反対があるため、いかなるメンバーも単独で支配することはない」という。中口の行動を抑制し、グローバルな秩序を守るため、「インド、ブラジル、南アの役割は重要であり、G20に加え、BRICSでもブラジルや南アとの関係強化を望む」と強調する。

ブラジルとインドを比べると、拡大BRICSに対する警戒論の根拠に違いがあると筆者は考える。

ブラジルの立場から言えば、その影響力が相対的に低下し、中口色が強まり、米欧との距離が拡大することが問題点として想定できる。ただ、カンピーナス州立大（UNICAMP）でBRICSネットワーク大学のコーディネーターを務めるブルーノ・ジ・コンチ博士（経済学）は、こうした議論は「外交領域のものであり、経済領域にはない」と指摘する。

強まるイスラム色、複雑な国際関係

いまのブラジルで左派・右派を問わずに一致できるのは、貿易への配慮である。ブラジルの2023年の輸出総額に占める対中シェアは30.7%と2位米国の11.0%を大きく引き

離す（UN Comtradeから算出）。世銀WITSによると、ブラジルは2021年に461億ドルの貿易黒字を計上しており、国別では対中黒字が344億ドルに上る。これに対し、対米では101億ドルの貿易赤字である。

米国はブラジルの主要輸出品である大豆、トウモロコシ、食肉、石油の生産・輸出大国であるため、ブラジルから米国への輸出は中国に比べると限界があるが、そうした商品を米国から買いたくない中国はブラジルからの調達を増やしてきた。この結果、ブラジルにとって中国は上得意のお客さんになっている。商売人国家としての伝統があるブラジルが中国との関係維持に腐心するのは当然である。

一方、BRICSの新メンバーをみると、インドにとってBRICSの拡大は権威主義色のみならず、イスラム色の強まりも意味する。インドは国内のイスラム急進派と彼らを支援するパキスタンの動向に神経をとがらせている。インドとの国境紛争を抱える中国はパキスタンと友好関係にある。こうした外部のアクターが自国の価値観を破壊する可能性に対する警戒心は、ヒンドゥー色の濃い与党BJPを基盤とするモディ政権に根強いと考えられる。

新メンバーとの関係構築にあたってインドが特に気を配るべき相手はイランであろう。イランはイエメンの反政府勢力フーシ派を支援しており、紅海での危機の源になっている。チャトゥルベディ所長は「中口はイランと親密である。我々はこれら3つの国に働きかけて、グローバルな倫理観と価値観を確実に追い求めなければいけない」と語る。その過程でインドがブラジルや南アの役割を期待していることは間違いない。

首脳会議で問われるルーラ大統領の手腕

ブラジル自身も中口寄りを受け止められることを歓迎しているわけではない。日本との関係強化の動きにその考えの一端が現れているかもしれない。5月の岸田文雄首相の訪伯に続き、11月にはリオデジャネイロでG20首脳会議が開かれ、2025年にはルーラ大統領の訪日が予定されている。日本との頻繁な首脳外交が展開されている背景として、日本の外務省関係者は「中口寄りとみられないよう、日本との交流を重視している側面もある」と分析する。

ただ、今後さらに加盟国の増加が見込まれるBRICSにおいて、ブラジルの埋没や拡大BRICSの瓦解といった事態も考えられる。それを回避したいのであれば、ルーラ大統領はインド固有の事情に配慮しつつ、中国との距離にも気を付ける必要があるだろう。

松野哲朗（中大・神奈川大非常勤講師）

浅草サンバカーニバル小史

浅草サンバカーニバル

詳細を語れるほど私のキャリアは長くないが、1981年に開催され今日まで続いている浅草サンバカーニバルがとても重要な役割を果たしていることは言うまでもない。

それ以前も関西や東海、東京に於いて、プロのミュージシャンによる演奏や神戸などブラジルとの交易等で関わりのある地域でサンバ愛好家が徐々に育まれていたが、ブラジル・リオで行われているコンテストによるカーニバルのパレード形式をモチーフとした浅草サンバカーニバルが約40年にわたり開催されたことで、音楽のみならず、踊り・衣装・ブラジルの文化への関心を持つ者を飛躍的に増加させていく要因となったのだ。

浅草サンバカーニバルは、芸人の街と呼ばれる浅草に縁のある喜劇役者、伴淳三郎氏が浅草を盛り上げるためのイベントを模索していた当時の台東区長に発案した。

早速、区長及び浅草関係者がブラジル・リオのカーニバルを視察することとなり、そして数年後の1981年、第1回の開催に至る。お祭りの町とはいえ、すごい熱量である。

私のサンバとの出会い

私は子供の頃、親にピックバンドの演奏に連れていかれた記憶があり、その時演奏されていたのがラテン音楽だった。

明るくいけど悲しい、悲しいけど明るい。せつない旋律がなんとも好きだった。そんなラテン音楽に興味のあった私がサンバをより深く知るきっかけとなったのは1990年頃刊行されていた雑誌『ラティーナ』やその他音楽誌等の活字メディアである。サンバの歴史や代表的なミュージシャンや作詞作曲家、リオのカーニバルの歴史と現地のサンバチームについての音楽用語など、様々な知識が育まれていくが、やはり実際の音を聴きたいと思うようになると、現在のように容易く情報を入力することが出来なかった時代だったので、とても苦労したのを思い出す。

レコード屋に行ってサンバのコーナーを見るも在庫数が少なく、比較的在庫のある輸入盤を取り扱う店舗でも試聴することが叶わず、ジャケットに描かれているデザインのイ

メージで買って聴いてみては求めている音源と違っていたり随分悩まされ、活字で得た知識と音楽のすり合わせがなかなか進まない日々を送るのである。

浅草サンバカーニバルは既に第10回を過ぎているこの時期、浅草サンバカーニバルの存在はテレビ等のメディアで知ってはいたが、映し出されるのは女性のビジュアルとお気楽な脳天気さが映し出されるばかりで音楽的な要素を感じることが出来ず全く興味の無い状況であった。

歩行者天国でサンバチームに遭遇

この頃、週末の日中に道路を通行止めにして人々に憩いの場として開放した歩行者天国が都内各地で行われていた。代々木公園付近も原宿駅から代々木上原へ向かう道路を歩行者天国として開放され、誰でも好きに様々なパフォーマンスをすることが出来る当時の若者にとっては自由に表現できる掛け替えのない場所であった。音楽もロックやジャズ、ブラスバンドなどアマチュアからプロまでが個々に集まり演奏。日没まで飽きずに観ていられるような場所だった。

ある五月晴れの日曜日、いつものように原宿側からそれらを観ながら歩き進めると奥の方から打楽器による速いテンポのリズムが鳴り響いてきた。

「なんだこれは！」と思わず足を速めて近づくと数十人の打楽器隊による演奏。

これはカーニバルのサンバのリズムだと直感、音の迫力に心奪われた。当時、私が自宅で飲食店を営んでいてアルバイトで働く人やお客さんは近所にあった東京外語大学の学生が多かった。そこでポルトガル語を専攻している人やブラジル研究会というサークルに所属している人と知り合い、歩行者天国で観た打楽器集団が大学生連合のサンバチームだということが分かった。

あの大人数で演奏する団体はそうは作れない。どこかにサンバチームがあればと案案すると音楽誌『ラティーナ』内メンバー募集欄に掲載されているサンバチームがあるのを思い出した。それならばサンバについても造詣の深い人物がいるのではないかと思い切って問い合わせてみる。

そして、1993年6月、仲見世バルバロスという社会人で構成されたチームに入会。チームのメンバーは年齢や職業もバラバラ、ということもあって、とても自由で新鮮な雰囲気。そしてサンバについて造詣の深い方々とも知り合うことが出来た。



初めて練習会場を訪れた際、演奏者が踊り手のどちらかを選択するのだが、以前、歩行者天国で聴いたあの速いテンポのリズムと音圧が忘れられずにいた私は、目の前で演奏されているリズムにまたもや心打たれ、多少ドラムや和太鼓の経験があったということで演奏を選択、スルドという大きな太鼓を担当することとなった。

カーニバルの速いテンポとサンバのリズムは、歌が無くとも長い時間演奏することが出来る。この単調なリズムの繰り返しはトランスさせる効果があり、集団行動することで一体感を体験できる。

演奏する我々も、日頃のストレス発散などに利用している感があるが、この点もサンバチームの魅力の一つと言っても過言ではない。日本でも古くからあった盆踊りもそのような効果を狙ったものと考えられる。いわゆる晴(ハレ)と憂(ケ)「非日常と日常」である。聴く者をワクワクさせるのは、そういう意味があるのではないだろうか。



星野清久
(仲見世バルバロス前代表)

▲筆者、山車の前にてテーマは「キャバレー」。2017年第36回浅草サンバカーニバル

仲見世バルバロス

練習に参加して「バルバロス」というサンバチームが浅草サンバカーニバルに出場していること、発足したばかりのJリーグの読売ヴェルディの応援をしていることを知る。

今は8月に開催される浅草サンバカーニバルの準備(曲の練習や衣装制作等)とサッカーの応援でチーム内は活気に満ち溢れていた。

Jリーグ2年目以降は専属応援団設立をきっかけに演奏機会は無くなっていくのだが、サッカー応援での演奏は、ボールの行方を観ながらノンストップ演奏、試合の流れを観ながらリズム音量を強弱し、点が入ればテンポアップして奏でる。とても楽しく良い練習となった。練習で汗を流した後はお酒を飲みながらサンバ談義やサンバを歌い演奏するのがとても楽しい時間だった。

サンバチーム所属の有無にかかわらず、カーニバル形式とは違い普段の生活の場所、例えば酒場や自宅や広場などで、小編成で歌を共有し演奏をするのを「バゴージ」などと呼ばれる形式も同時に発展して行くのだが、この時代のサンバチームのメンバーはカーニバル形式とバゴージそのどちらも楽しむ事が出来た。

サンバの魅力はなんといっても歌、そしてリズムである。私はバゴージにも興味を抱いていく。

第13回浅草サンバカーニバル

初めて出場した第13回浅草サンバカーニバルは優勝。途中からの参加で準備など何も協力は出来ていなかったが、前日の台風の影響もあり汗と涙の楽しい貴重な経験となった。先達の方から初期の浅草サンバカーニバルでの苦労話を聞くと、サンバが何と分からない仮装行列のようなものだったと。当時のVTRを拝見して確かにそう思ったが、皆さんの「リオのカーニバル」のようにしたいと

いう思いが一年一年進化を続けて、10年でブラジルで使用される楽器や衣装も充実し、ブラジルに滞在して現地のカーニバルを経験する者も増え、その後10年ごとに振り返って見ても浅草サンバカーニバルに出場しているチームは、一層進化し華やかなものになっていった。

他のサンバチームのメンバーとも浅草サンバカーニバルの発展について語り合い、共に活動していく中、サンバチームの協会が結成された。十数年前には各チームの代表経験者など(ご老体)から成るバンド、「ペ・ナ・コーバ」を結成。浅草サンバカーニバルでは、お互いライバルでもサンバを愛好する者同士がサンバを愛でる姿を皆に見せたいという思いで始めたが、今では肩に力の抜けた演奏を楽しむ仲間として活動している。

演奏スタイルは先に述べたバゴージなどの小編成形式だ。私がサンバを始めた頃には既にバゴージブームの只中にあった。

1980年代初頭から活躍したバゴージグループ「Fundo de Quintal (フンド・ジ・キントル)」が来日し、日本でも学生によるバゴージバンド、「バランサ」が結成されるなどカーニバルの形式と違った発展をしていく。

一方で私は益々バルバロスの活動に没頭していく。チームの年間活動も入会時は冬の間はちょっと活動停止するような時代だったが、2000年前半には浅草サンバカーニバルを中心に、一年がびっしりとスケジュールされるようになっていく。さらに2000年代後半にチーム代表となるとさらに多忙になっていくのである。同時に浅草サンバカーニバルも発展していくのだが、その分、余暇



◀「バランサ」と「ペ・ナ・コーバ」ジョイントライブ

を楽しむためのサンバをする機会を失っていった。

事態が変わったのは2011年東日本大震災で浅草サンバカーニバルが中止になった事だ。練習することは出来るが目標を失ったためにチーム活動が少し止まり、チーム内外でサンバで遊ぶ事が試みられるようになった。

チーム内はもちろんだが、他のチームのメンバーとの交流がここで激増する。

私も他チームの方々と交流するきっかけとなり、各サンバチームの浅草対策が激化して忙しくなり過ぎていたことに気付く機会にもなった。

翌2012年、浅草サンバカーニバルは無事開催されたが2019年までの間に気候変動による熱中症問題が起こり、開催時期を8月から9月に変更するようになる。

翌2020年～2022年の3年間はコロナ禍で中止、2023年はコンテスト形式でない短距離でのパレードを開催。今年2024年は5年ぶりにコンテスト形式での開催となる。

現在活躍しているサンバチームの皆さんが、気候変動の影響でとてもパフォーマンスし難い環境にある事を憂いている。

サンバとの付き合いは30数年

ありふれた、人のいとなみの中での喜怒哀楽を曲に込めたサンバに於けるその観念と、カーニバルで演奏される打楽器隊のリズムに魅了され30数年活動をして来た。

その間、所属するチームの代表も務めた。2年前に、その職を後進に譲った現在は、「バランサ」や「ペ・ナ・コーバ」のメンバー、その他サンビスタの方々と、のんびりサンバを楽しむ日々を過ごしている。加齢とともに激しいリズムを奏でる演奏から、老後まで楽しめるスタイルに変わっているが、サンバはいつまでも飽きのこないものである。



◀バゴージの風景

バランサのサンバ その歴史をDENが振り返る



DEN
(サンビスタ、バランサ主宰)

バランサ誕生前

みんなとにかく歌うのが好きだった。毎週末に大勢の大人たちがテーブルを囲んで酒を飲み、みんなで歌を歌っていた。その中心にはどんなジャンルの曲にもギターの伴奏を即興で付けている親父がいた。その輪から少し離れた座布団の上に横になってウトウトしながら眺めている、それが自分に思いつける一番古い記憶かもしれない。そんな時代に育った。勉強もスポーツも一生懸命やったが、それでも小中高と一貫して音楽にハートを鷲掴みにされていた。ジャンルは絞り込めてはいないし、腕の方には問題はあったが、とにかく「当方プロ志向」という看板だけは心に掲げて高校の同級生とバンドを組み、曲を作り、ライブを繰り返した。そんな中で外国語大学に入る。日本から1番遠い国への憧れという無理やりで適当な理由から、それほど興味なかったポルトガル語ブラジル語科を選択。そこで出会った相棒コッキーと2人でブラジルへの音楽探究の旅。帰国後サンババンド「バランサ」を結成。それから32年、現在に至るというわけだ。まさか自分にこんな人生が待ち受けていたとは。ウケる。笑

大学生活2年目

「遊んでる暇はないんだよ。俺は真剣に音楽をやってるんだよ、君らと違って。」どうやらそう答えたらしい。「僕が学生連合のサンバチームにDENさんを誘った時、こんなふうと言われて、この人は凄いなと思ってたんだ。」あの頃はまさにバブル。学科の同級生も先輩達もみんなキラキラしてお洒落だった。どうせ楽しく練習とか合宿していちゃいちゃして、。ひがんでいたのかもしれない。馴染めなかった。でももしあの時に学生チームに参加していたらこれほどサンバにハマっていなかったに違いない。案の定ポルトガル語も大して勉強



現在のバランサ

強せぬまま、ロックバンドを続けながらジャズにも興味を持ち始めた。DENのサンバの夜明けは1年後に入学してくるコッキーの登場を待たなければならなかった。案の定、留年を言い渡され、彼と同じ教室に座ることになる。ポロアパートの狭い部屋には音楽が溢れていた。しょっちゅう泊まりがけで遊びに行っていた、彼の所蔵するファンクやジャズのビデオを見ながら、うんちくやベースプレイを聴いた。「ベースやるんだ！いいね、いいね！」これがコッキーに話しかけた最初の言葉だ。新入生歓迎コンパでのことだ。秋の学園祭での2年生サンババンドにベースがいなかったのが新入生だけに入れてやるか、なんて思った。結局彼がプレイしたのは間違いに上手い花形のOBバンドだった。コッキーは最初から同世代の中ではレベチだった。

サンパウロのサンバクラブにて

「日本に帰ったらこういうバンドやりたいね。」深夜のサンパウロのサンバクラブでのことだ。20歳そこそこの2人にとってブラジル行きは、旅というよりはまさに命がけの冒険だった。学会が

行われるようなステージに2,30分おきに次々と無名のサンババンドが入れ替わりで演奏しては去っていく。キーボードがいたり、ドラムやベースがいたり、たった3人ほどだったりバンドによって様々だった。何にそんなに心を打たれたのだろうか？きつと愛と自由だ。日本で感じてきた競争と商売にまみれたエンタメ音楽に比べて、なんと穏やかで自然なことか。この時サンバに恋に落ちた。

バランサ結成

住み込みで都内シュラスコ店で演奏しているリオのミュージシャンに毎週会いに行った。アパートにまで押しかけてサンバやポルトガル語を教えてもらった。うまいと噂を聞きつくと会いに行き口説いて、学生を中心にバランサを結成。すぐに都内各所でライブを始めた。照明も音響も派手な原宿クロコダイルに沢山の学生を集めてのライブにそろそろよからうとそのカリオカを招待した。「DEN、叫んじゃダメだ。心を込めてナチュラルに。それがサンバだよ。」わかっていたつもりなのに。心に深く刺さった。ロックの癖が抜けるのにまだ数年かかることになる。

「高学歴低収入バンドなんだよ、こいつらは。」ポルトガル語に訳しづらい。日本のレコード会社社長が言った。ブラジルでのレコーディングとCD発売に足るバンドかを見極めるため、超一流プロデューサーが来日した。レパートリー100曲以上のリストを見せ、彼が指差す曲を演奏した。合格だった。が、こう言われた。「サンバで成り上がろうと思うなら、今後はクソみたいな曲はやるな。」

結成から数年後バランサで渡伯、有名テレビ番組をはじめ、あらゆるメディアに取り上げられて、帰国する時には空港で声をかけられるほど有名になっていた。帰国後は群馬県あたりのブラジルコミュニティと呼ばれ毎週末ライブを繰り

返した。ブラジル人が求めるものは何でも歌った。歌詞の内容も、サンバとしての価値も考えずに歌っていた。うければ何でも良かった。「ピエロになるな、本場リオでサンビスタ達と対等に勝負するんだ！」彼の鋭い洞察力にはいつも恐れ入る。

今考えればあつという間のバランサの青春期だった。信じられないような憧れのスター達を迎えたリオ録音のアルバムを発売。リオで数々のステージにゲストとして迎えられた。ソロライブも行った。

マンゲイラのショーに出演

リオサンバチームの老舗マンゲイラのショーに出演した時のことだ。ブラジル音楽のご意見番にステージでこう紹介された。「今までアメリカ人やヨーロッパ人に我々のサンバをちゃんと表現出来たものはいたのだろうか？ここから1番遠い国の日本の若者がそれを成し遂げている。紹介しよう、バランサ!!」



▲ Dona ZICA (左)
マンゲイラ・イン・ザ・エルモ
2001年

夢のような出演者達との豪華なショーの後。創始者の故カルトーラの妻であった車椅子姿のドナ・ジッカ(Dona ZICA)が、光栄なことに帰国の際の我々を劇場の出口で待ち構えていた。擦り切れるほど聴いたレコードジャケットに写っていた伝説の彼女だ。「あなた達、とても良かったわよ！さ、おばあちゃんにキスしてちょうだい！」マウストゥーマウスのキスは、日本の若者にはなかなかハードルが高かったが、思い切って受け入れた。今となっては忘れられない貴重なキスになった。彼女は翌年89歳で他界した。

バランサのフィールドは日本

ブラジル人になれるはずもなく、なるべきでもない。いくらちやほやされてもバランサのフィールドはあくまでも地球

の真裏の日本だ。とはいえ、日本でのサンバの認識はひどい。灼熱のカーニバル、羽根を付けたお姉さんの裸ダンスのみだ。音楽だという認識もない。愛するサンバの魅力を広めたいと奮闘しても、メディアのコミカルでお色気なモノとしての扱いを受けて、大衆の偏見はさらにゆがんでいく。クイズ番組、お笑い、歌番組、CM、...

「本場の世界観そのものに日本語で作曲したサンバを日本人に向けて」というのが現在のバランサのスタイルだ。少しずつでもいい、サンバやバランサの魅力に気づく人を増やすというのが日本人である我々のミッションであろう。

1stアルバムから多大な協力をしてもらっているアルリンド・クルス(Arlindo Cruz)に自宅に招かれたことがある。たくさんの親戚が集まる中、バランサの日本語サンバを披露した。大いに盛り上がり、興味深々の1人が「日本語で何を歌っているの？」と尋ねるのを笑って遮り、アルリンドは「考えるな、感じる！」と諭した。そう、元々は自分だって意味もわからなかったがサンバにハートを射抜かれた。ブルースリーさながらの言葉がいまも我々の指針となっている。

結成から32年。まさにサンバの黄金時代に立ち会い、たくさんのレジェンド達と交流した。日本語でのサンバを作った。我ながら良い曲だ。今ではリオには本音で話せるサンバミュージシャンの仲間達がいる。道を歩きながら、街角のパー



▲ Arlindo Cruz (サンバ歌手) 2001年



▲ 2023 リオデジャネイロにて。右から2人目、LULA MATOS (Grupo GALOCANTÔ)

ルで、何度もメロディや歌を繰り返しながら一緒に曲も作る。コッキーと2人になったバランサはますます順調だ。情熱が尽きる気配はない。そういえば「もう十分にサンバはやった。」と言い残して去ったメンバーもいた。ちっとも気持ちがわからない。道半ばにして倒れていったレジェンド達の顔が浮かぶ。彼らの無念さも引き継いでまだまだサンバを楽しむ続けたい。まだまだ足りないのだ。

愛と自由を求めて

「これからはサンバがもっと楽しくなるなあ。俺は店を作ってからずっと、こういうバンドが出てくるのを待ってたんだよ。」青山ブラッサオンゼのカウンターの中で故浅田オーナーがバランサの初出演を見ながら語ったと聞いている。ここでプロとしての活動を開始、それ以降惜しまれながら閉店するまで30年にわたりコスタントに演奏を続けることになる。

「たくさんのミュージシャン見てきたからわかるんだよ。お前らは大丈夫！」コロナ禍で音楽活動もできずすっかり弱気になっていた我らを、病床にも関わらず励ましてくれた浅田クラウディア。旦那のあとを引き継ぎブラッサオンゼを長年に亘り盛り上げてきた。

奇しくもどちらも亡くなる数日前の言葉だ。この夫婦の生前の言葉が我々を支えてくれている。

日本を楽しくしていく、そしてこれからも。「愛と自由」を求め続けるバランサの人生を賭けた「命がけの冒険」はまだまだ続く。期待して欲しい。

ネpomセノの大傑作「交響曲第1番」を指揮してみようこと (2024年5月7日、ラ・フォル・ジュルネTOKYOにて)



木許裕介 (指揮者、日本ヴィラ・ロボス協会会長)
(c)Yasutaka Eida

『ブラジル特報』3月号に、「ブラジル・クラシック音楽の父」たるアウベルト・ネpomセノのことを書いた。実は執筆時に、コロナ禍以降数年ぶりに東京で開かれたクラシック音楽のフェスティバル、「ラ・フォル・ジュルネTOKYO 2024」(以下LFJ)に出演することが決まっていた、そこで私はネpomセノの作品を指揮しようと企んでいたのである。

LFJ(ラ・フォル・ジュルネ)とは

LFJは毎年テーマが決まっている。今年のテーマは「Origines」。つまり、クラシック音楽にまつわる様々な「起源」をめぐるものであるという。ならば、ブラジル・クラシック音楽におけるOrigineの一人であるネpomセノの作品を紹介しないわけにはいかないだろう。ということで、私が指揮するフェローオーケストラという団体にネpomセノの「交響曲第1番」のことを紹介したところ、みなこの作品に大変共感してくれて、晴れて演奏する運びとなった。

フェローオーケストラとリハーサル



ハードルその1

ところで、ブラジル・クラシックのオーケストラ作品を日本で演奏する際に立ちちはだかるハードルは主に4つある。第1に、楽譜の入手が容易でないこと。オーケストラの場合、指揮者用の総譜と各楽器奏者用のパート譜の両方が必要となるのだが、ブラジル・クラシックのオーケストラ作品のうち、日本でこれらが市販されているものはほぼ無いと言って良い。つまり海外から輸入するか、作曲家遺族や作品の管理団体などに問い合わせ

てレンタルの手続きをするか、といったプロセスが必要となる。連絡しても一向に返事が返ってこないことは日常茶飯事、手続き完了がギリギリとなり冷や汗を流したことは一度や二度ではない。

ハードルその2

第2に、楽曲の著作権が失効していない曲が大半であること。ヴィラ・ロボス(1959年没)以降のブラジルのクラシック音楽作曲家たちの作品の多くは著作権がまだ有効であり、従って楽譜のレンタルや演奏に際してそれなりの費用を覚悟せねばならない。これらは作曲者の正当な権利としてあるべきものだが、しかし現実的には、財政に余裕のないオーケストラにおいては「費用がかかるので別の曲を…」と言われてしまうことも多く、自分がやりたいからといってすぐに演奏できるものではない。しかも、著作権有効期間内のブラジル・クラシックの楽曲楽譜をレンタルした場合、紙の印刷楽譜でやり取りせざるを得ないことも多く、その場合は「ブラジルから紙の楽譜が届く→演奏後にブラジルへ紙の楽譜を返送する」というプロセスが必要となる。時間的にもコスト的にも負担大というのが正直なところである。

ハードルその3

第3に、オーケストラに特殊な編成を要求する楽曲が多いことだ。とくに打楽器には、通常のオーケストラでは使われることのないブラジルの民族打楽器が求められることが多い。また、オーケストラでは使用されることが稀なサクソフォンがしばしば利用されたり、特殊楽器を用いるのにその出番は長い曲中でわずか数秒だけであったりと特殊な管弦楽法が問題になることもある。つまり特殊楽器の調達およびそれらを演奏する奏者の確保という点でも演奏コストが嵩むのである。しかし、まさしくこうした色とりどりの楽器の利用こそが、ブラジル・クラシック音楽の魅力の一つであることは間違いない。

ハードルその4

第4に、楽譜に問題が多いことである。ブラジルの研究者たちが懸命に楽譜校訂作業を行なっているとはいえ、西洋の主要な作曲家たちの楽譜と比べれば、それらの進捗は決して十分とはいえない。たとえばヴィラ・ロボスの楽曲の出版譜には膨大な数の間違いが見られるし、指揮者用の総譜と奏者用のパート譜で不一致を起こしていることも多々である。ゆえに、苦勞して楽譜を購入しないしはレンタルしたとしても、それが手元に届いてからも相当な精査が必要となる。

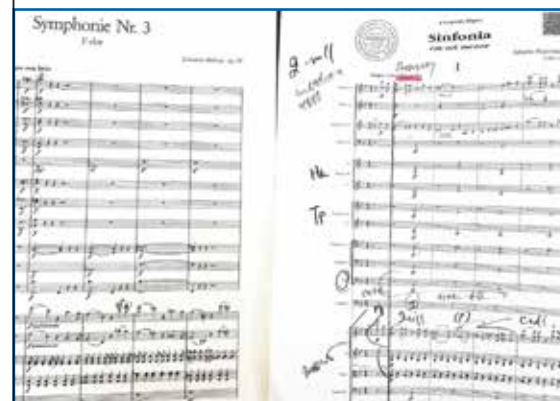
……と、苦勞を書き始めるとキリが無いのであるが、今回演奏したネpomセノの「交響曲第1番」はこれらのハードルを比較的クリアしやすい楽曲であった。まず楽譜の入手は、駐日ブラジル大使館にご協力を頂き、2019年に完成したばかりの校訂版楽譜をブラジル音楽アカデミーよりレンタルした。しかも、PDFデータでレンタル可能であったため、国際輸送の手続きを踏む必要が無く、すぐに手元に得ることが出来た。(この新版を用いた演奏は今回が「日本初演」となったようである)

著作権の問題

また、ネpomセノは1920年没ということで楽曲の著作権が失効しており、演奏に際して費用が発生することが無かったことも幸いであった。かつ、「交響曲第1番」はオーソドックスなロマン派のオーケストラ編成で書かれており、特



▲ネpomセノ楽譜



▲ブラームス交響曲第3番とネpomセノ交響曲第1番冒頭の比較

殊楽器を一切必要としないものであったため、奏者確保や楽器確保が比較的容易であった。とはいえ、楽譜の入手に際してはブラジル本国と何十通にも及ぶメールのやり取りを行うことになったし、入手した楽譜には明らかな音間違いが散見されたため、いざ演奏となるまでの道のりは決して平坦なものではなかった。

さて、この曲の楽譜を入手して一通り読んでみたときの直感は、「モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームス、ワーグナーの語法が強く感じられる。響きは全くドイツ・ロマン派の響きだが、しかし僅かにブラジルの要素が織り込まれているようにも感じられる。」というものであった。

ト短調、そして内声のシンコペーションは同じくト短調のモーツァルトの交響曲第25番を思わせられる。あるいはこうした内声の扱いとシンプルだが緊張感を孕んだ和声進行、さらには金管楽器の扱いがベートーヴェンの第3番「英雄」交響曲を想起させる。一方で第1楽章の終盤に突如挿入されるトランペットのファンファーレは、ワーグナーの「ワルキューレの騎行」のようでもある。

ブラームスからの影響

しかし、これら以上に最も近しさを感じさせるのはブラームスなのだ。ト短調、4分の6拍子、随所に挟まれるヘミオラ……何かの作品に似ていると考えて気づく。ブラームスの交響曲第3番だ！それは偶然の一致か、それとも意図的なものか。とにかくネpomセノとブラームスの関係をもっと深掘りせねばならぬ。この交響曲を書きはじめた1893年頃のネpomセノはどのような状況にあったのだろうか。そう思ってブラジルの研究者たちの論文を搜索するうちに、面白い事実が分かってきた。

以前の『ブラジル特報』で詳述したように、ネpomセノは1890年にベル

リンに渡り、ブラームスの友人のヘルツォーゲンベルグに師事した。1891年にウィーンへ旅しブラームスの作品に触れ、1893年にグリーグから進むべき道についてのアドバイスを、すなわち国民楽派という思想に触れて感銘を受けたという。1894年にはベルリンフィルを指揮。その後、フランスに渡ってからブラジルに戻り、ブラジルを代表する音楽家・教育者として時代を築いていく。ヴィラ・ロボスにフランス近代音楽の扉を開いたのも彼であった。

驚くべきことにネpomセノは、1893年3月13日にハンス・フォン・ビューロー指揮のベルリンフィルで、ブラームスの3番を聞いていたことが判明した。その時の演目はベートーヴェン4番、ハイドン96番、そしてブラームス3番。そしてこの演奏会が、ブラームスと親しく当代一の指揮者であったビューローのほぼラスト・コンサートとなった。

そしてネpomセノは、ビューロー指揮のブラームス第3番を聞いたあとから自身初の交響曲を書こうと模索をはじめ、同年にグリーグに会って自身の出自の国の文化・歴史を作品に織り込むという思想に触れた。そして1894年(ビューローが他界する年でもある)に、交響曲の輪郭を作り上げたのち、何度も改稿を重ねて練り上げ、1897年8月1日にリオで本曲を初演するに至ったようである。

こうした経緯を把握した上で、ブラームスの交響曲3番と本曲を比較すれば、その一致は単なる偶然とはいえないだろう。ネpomセノはおそらく、ブラームスの交響曲3番を頭に置きながら自身の交響曲第1番を書いたのだ。

“企業秘密”を少々明かすと

一方で彼がこの作品を書く時期は、グリーグの影響で国民楽派の思想に感化されたあとであり自身の初の交響曲、実質的にはほとんどブラジル初の交響曲といってもよい作品を作るにあたって、自らの出自＝ブラジルの要素を一切含めなかったとは考えづらい。つまり、本作からブラジルの要素を読み出そうとすることは牽強附会ではないはずだ。

確かに楽曲形式はオー

ソドックスなソナタ形式で、ヴィラ・ロボスのように民族楽器は用いないオーソドックスな管弦楽編成であるが、楽曲の重要なポイントにブラジルの要素やブラジルのものと西洋音楽の融合を図った形跡が窺える。では、いったいどのあたりがブラジルのものか。これは指揮者としての私なりの「読み」として企業秘密(?)であるし、リハーサル数時間分を要



する内容になってしまうのでここでは詳述しないが、一つだけ紹介しておこう。本曲の冒頭、この独特のアウトタクトは私には極めてブラジルのものとして映っている。

ブラームス3番が2つの和音から始まるのに対して、ネpomセノ1番は休符+4分音符+4分音符というアウトタクトから始まる。このアウトタクトは一体何であるのか。どれぐらいの時間とテンションと流れて、あるいはどういう弓の使いで、呼吸で演奏するべきなのか。ここに、この曲の楽譜を読み解き、再創造する楽しみが詰まっている。そしてこれはショーロ・セッションの合図なのだ、という、いささか謎めいた解釈だけを提示して、筆を置くことにする。先日のLFJにおいても、この解釈をもって演奏を作り上げた。再びこの作品を取り上げる際は、ぜひ皆様にお聞き頂けたらと願う次第である。



▲ラ・フォル・ジュルネ、演奏後

▲ラ・フォル・ジュルネのステージにて

ユーチューバーGuti&Ellie夫妻、 ブラジル探索の旅は続く



コッペデひろみ
(音楽家、在伯青森県人会副会長)

ブラジルで大人気の Olá Guti はご存知だろうか。YouTube 登録者数は40.5万人、Instagramは62.3万人、TikTok は 29.6 万人と人気が高く、登録者数の殆どがブラジルや日本、世界各国に住むブラジル人だ。

日本で生まれ育った Guti 氏が YouTube を始めたきっかけが、ブラジル人の妻である Ellie 氏と出会い、結婚の挨拶をしにブラジルに行った際、ポルトガル語が話せないことから親戚とコミュニケーションが取れず落ち込み、帰国後ポルトガル語の勉強を始める。彼の勉強方法は、1 つテーマを決め、文章を作成し暗記、カメラの前で話すことだった。

撮影した動画を Youtube に投稿し始めるとブラジル人たちから注目され、瞬く間に人気を博する。そして、撮影した動画を YouTube に投稿しているうちに自然と Ellie 氏も一緒に出るようになる。Ellie 氏は写真を学ぶために単身ロンドンへ留学、その後東京を拠点にポートレート写真、数々の大手メーカー、アパレル企業、旅行会社向けの広告写真を撮影し、写真家として活動している。

2023 年 1 月、東京・青山にある駐日ブラジル連邦共和国大使館では、夫妻で 7 ヶ月間の車中泊での

日本一周の旅に出て、日本の素晴らしい景色や人々、そして日本で活躍するブラジル人達を紹介した写真展『Os jovens nipo-brasileiros no Japão』を開催した。

そのような経緯がある国際夫妻の Ellie & Guti 夫妻と私が初めて出会ったのは 2023 年 4 月、Mogi das Cruzes 市で開催された秋まつりだった。

小雨がちらつく生憎の天気だったのにもかかわらず彼らの出店ブースの前は長蛇の列だったのだが、この時私は彼らを知らず、「人気インスタグラマーが来てる!」と騒いでいる人たちが周りにいたので気になり、一緒に秋まつりに行った友人と出店ブースに寄りEllie氏に声をかけてみることに。日本人女性2人が声をかけたのが珍しかったのか、Ellie氏は忙しい中私たちを追いかけてきてくれ、この時販売していた本を紹介、プレゼントをしてくれたのだ。それが、前述した写真集『Os jovens nipo-brasileiros no Japão』だったのである。

秋まつりでは写真集などを販売、Guti氏が毛筆で購買者の名前を書いていたのだが、これが大人気で列は途切れることなく、休憩もなしにファン達と交流をしていたという。後日彼らから聞いた話だが、まさかこんなに沢山の人が来てく

れるとは思っていなかったそうだ。何故かと聞けば、ブラジルに来てから 1 ヶ月も経っていなかったからだという。その謙虚な姿勢と秋まつりでの彼らの人気ぶりを思い出し、改めて興味深い夫妻だと思った。

また、影響力があることから、旅行代理店 H.I.S Brasil Turismo (サンパウロ支店長 荒井亮磨) と契約をし、企業の知名度・認知度をあげている。

さて、ここで動画撮影の裏話を。動画では自然に見えるが、カメラの前に出ることに慣れていなかったで、初めは苦労をしたという。今でも人前で撮影となると恥ずかしさがあり、場合によっては撮り直すことも多いとのこと。視聴者側からすると、驚きの事実である。人気チャンネルはこうした苦労もあり作られているのだ。

さて、彼らは動画をみてわかるようにブラジル国内の様々な土地に滞在しているのだが、ブラジル北部、中部、西部はまだ行けていなく、南部、北東部は結構巡ったという。

その中で文化に衝撃を受けたのは北東部の Sertão と呼ばれる乾燥地帯。Vaqueiro と呼ばれる人 2000 名が集まり、馬に乗って乾燥地帯を行進する姿は圧巻だった。ブラジルの景色は Lençóis Maranhenses が 1 番思い出に残り、別の惑星にきたかのような、壮大な自然に圧倒されたと Ellie 氏は述べた。

また、ブラジルの田舎で昔ながらの生活を経験することも楽しんでいる。旅のポイント聞いてみたところ、ネットで比較的治安の良さそうな地区を検索し、毎日外食すると高くなるので、キッチンが付いているアパートを選び、フライパンや調味料は持ち歩いているとのこと。

今後の展望だが、ブラジルの全ての州を周り、ブラジル人の日常の写真や風景の写真を撮影し、この旅が終わった時、ブラジルで撮った写真の個展を日本で開くことが今の目標だと述べた。

これからも注目していきたい夫妻である。



新刊書紹介



◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『ソフィアの災難』
(クラリッセ・リスベクトル著、
福岡伸洋／武田千香編訳)

没後 47 年のリスベクトル。今では 20 世紀の世界文学を豊饒化した巨匠としてブラジルの国境を越えて再評価されている。米国では 2015 年にペンギンブックスから選集が刊行され、映像化は不可能といわれた『G・H の受難』は映画化され今年 4 月ブラジルで一般公開 (ルイス・F・カルヴァリョ監督) され、話題を呼んだ。本書は日本で独自に編集翻訳された短編集で実に稀有にして時宜に合った出版企画だ。訳文も読みやすく一般読者に薦めたい。(河出書房新社 2024 年 6 月 304 頁 2,700 円 + 税)

『ラテンアメリカ文学を旅する 58 章』
中南米諸国において数世紀にわたって行われてきた文学活動に関する、なんとも画期的な“総合旅行案内”だ。従

来のスペイン語圏文学至上主義に束縛された、啓蒙型の文学案内からフリーな視点を共有する執筆者たちは、フットワーク軽く文学を旅する案内人たちだ。ブラジルも英語圏やフランス語圏のカリブ諸国も米国におけるラティーノ文学もカバーしているから、マルケスもカルペンティエルもアマードもマリーズ・コンデも“旅の友”となる。(明石書店 2024 年 5 月 364 頁 2,000 円 + 税)

『アンドレーア・ザ・スーパーキッカー』
(きたがわとも著)

ブラジル・サンパウロを舞台とする物語マンガ電子版。主人公アンドレーアは非日系のブラジル人だが、父親の仕事 (大学教授) の関係で日本で生まれ育ち、10 歳の時ブラジルへ帰国。11 歳になってサッカーに目覚め、プロの女子サッカー選手になる目標を自らたて、女子サッカー養成学校へ、と物語は展開していく。英語版ポルトガル語版が先行し、今回日本語バージョンが販売となった。アマゾン URL は <https://amzn.asia/d/0gkjMGEi> (電子版漫画 Kindle 版 2024 年 5 月 45 頁 税込 199 円)

『「多文化共生」言説を問い直す』
(山本直子著)

1989 年の入管法改正に伴い急増した。在日ブラジル人の歴史が 30 年を超えた現在、日本生まれの第二世代が日本とブラジルの間で属性と国籍を巡って煩悶している。政府文書にある言葉だけの多文化共生と、地域社会における多文化共生の実態があまりにもかけ離れている現状を、自身の自治体職員としての勤務体験と研究者としてのフィールド調査を通じて再認識した著者による社会学論考。重層的考察を深耕した成果を文章化した力作。(明石書店 2024 年 3 月 272 頁 4,200 円 + 税)

『医療通訳者の仕事』
(中萩エルザ著)

名古屋や関西方面で 20 年以上にわたって医療通訳に携わってきた著者は、ブラジル日系二世の医師であり、複数の大学や看護専門学校では講師として活躍中である。その実務経験をふまえて、医療通訳の必要性、現場での苦労・難しさを叙述しているが、医療通訳の倫理や専門用語についても、書き込んでいる。さらには医療訴訟での通訳についてもご自身の体験をもとに言及しており、「医療通訳者の仕事」の実態を語った貴重な著作となっている。(風詠社 2024 年 6 月 444 頁 2,000 円 + 税)

!!「ブラジルあれこれ」!!

ポルトガルで広まるブラジルのポルトガル語

今回は、BBC News Brasil のサイトが、近年、ポルトガルにおいてブラジルのポルトガル語の影響が拡大している等報じているので紹介してみたい。

ポルトガル人にとってブラジルのポルトガル語が身近になった背景として、1977 年に同国で放映されたブラジルの Telenovela (連続テレビドラマ) である「ガブリエラ (Gabriela-Cravo e Canela)」が大ヒットしたことが大きく貢献している。ドラマの中で使われる表現 (例えば、moço bonito) が、ポルトガル人の心をとらえ、新しい流行になった。また、この間、ポルトガルに在住するブラジル人の数も増え続け、現在では、ポルトガルの人口約 1000 万人に対し、40 万人を数えるほどになっている。このことも、ポルトガル人が、ブラジルのポルトガル語に日常的に接する機会を増やしている。

コロナ禍の前後から現在に至る最近の顕著な現象として、特にティーンエイジャーや子供たちがフェリペ・ネト/ルカス・ネト (Felipe Neto/Luccas Neto) 兄弟をはじめとするブラジル人気ユーチューバー (チャンネルの登録者数はそれぞれ 4000 万人を超える) やインフルエンサーに強い影響を受けて、彼らが使う言葉を使い始めていることだ。現場の教師からは、様々な例が報告されており、また、保守的な親から子供たちの言語環境を心配する声も上がっている。

それでは、どのような言葉が実際に使われているのだろうか。ポルトガルで使われるいくつかのブラジルの語彙 (カッコ内は、ポルトガルで通常使われる言葉) を挙げてみる。

・bonitinho (giro かつこいい)、grama (relva 芝)、bala (rebuçado キャンデー) geladeira (frigorífico 冷蔵庫)、ônibus (autocarro バス)、listra (risca 縞模様)、cara (pessoa 人)、dica (sugestão ヒント、助言) などである。

・さらに、bagunça (混乱)、fofoca (噂話)、curtir (楽しむ) のようなブラジルの表現もよく使われる。

このようなブラジル表現の広まりに対し、「ポルトガル語の危機」であるとして反発をおおるような新聞の見出しも見られたが、他方、言語学者の間では、これは一種の流行のようなもので、どの言語にも見られることであり、短期的には、ポルトガル語の基本的な構造に影響を与えることはないという冷静な反応が主流だ。また、ある現場教師からは、子供たちの語彙の広がり、多文化理解増進という意味で、むしろ歓迎すべきとするコメントが寄せられた。

本誌では、これまでもポルトガルのポルトガル語とブラジルのポルトガル語の違いについて触れたことがある。両国に住んだ経験から言うと、生活に直結する面白いテーマであることに疑いはない。本稿についてご関心の向きは、直接以下の 2 つの記事にあたってみることをお勧めする。

Por que expressões típicas do Brasil estão pegando em Portugal - BBC News Brasil

Portugueses falando 'brasileiro'? Como variante usada no Brasil influencia em Portugal - BBC News Brasil (MK)

インフレ調整及び利息に関する最近の法改正及び裁判例



柏 健吾
(TMI 総合法律事務所
日本法弁護士現在ブラジルで勤務)

1. はじめに

ブラジルで生活をしたことがある人やビジネスを行ったことがある人には自明のことであるが、ブラジルのインフレ（インフレーション）率は恒常的に高く、また、金利も高い。インフレ率については通貨がリアルに切り替わった以降（1994年）は10%未満で推移しているが、過去には年間2,947.73%を記録するなどインフレが社会生活に大きな影響を及ぼしていた。そのため、法律の世界もインフレを前提に設計されている。金利については、ブラジル中央銀行のデータによれば1993年3月から2024年6月までの平均政策金利（SELIC）は12.25%であり、市中の貸出金利は世界の中でも非常に高い。そのため、金利についても法律上問題となることが多い。

日本では過去30年近くほぼインフレがない状態であったため、経済活動においてインフレを意識することはほとんどないが、ブラジルでは、インフレ率に応じて日用品やサービスの価格が毎年上がることが一般的である。法的な観点では、たとえば、雇用主は、労働協約により定められる昇給率（インフレ率などにに基づき決定される）に従って従業員の給料を毎年上げる必要がある。また、ある金銭債権が裁判で争われた場合、裁判が確定し実際に支払われるまで（数十年に及ぶこともある）債権額がインフレ調整されるため（かつ金利も加わる）、債権額が当初の金額と大きく異なることは珍しくない。

本稿では、インフレ率や利息に関する最近の法改正及び裁判例を紹介する。

2. 金銭債務不履行時のインフレ調整及び延滞利息に関する法改正

(1) インフレ調整

売買代金や借入金の支払債務などの金銭債務の不履行時のインフレ調整を規定していた民法309条が2024年法14905号により改正された。同条は、「債務が履行されない場合、債務者は、損害賠償、利息、定期的に公表される公的指数に基づいて調整された金額及び弁護士費用を負担する」と規定されていたが、改正により、本文と単項という構成に変更され、本文は「債務が履行されない場合、債務者は、損害賠償、利息、調整された金額及び弁護士費用を負担する」とされ、単項として「金額の調整に関して当事者間の合意がない場合又は特定の法律で定められていない場合は、ブラジル地理統計院（Fundação Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística：IBGE）が定める拡大消費者物価指数（Índice Nacional de Preços ao Consumidor Amplo：IPCA）という指標が適用される」という条文が新たに規定された。従前は当事者間の合意がない場合は裁判

例に従い様々な指標が用いられていたが、今後は、拡大消費者物価指数に従いインフレ調整されることになる。

(2) 金利

2024年法14905号は金利についての民法の規定も改正している。民法591条は、「経済的目的を有する契約には利息が発生するものとし、その利息は、406条に規定される率を超えてはならない」と規定されている。2024年法14905号は、同条で言及されている406条を改正し、「利息又は利率について当事者間で合意されていない場合、又は、特定の法律で定められている場合、法定利率による」とした。そして、新設された同条1項において、法定利率はSELICからIPCAを差し引いた率とすることが規定された。

さらに、2024年法14905号は、高利貸法（1933年政令22626号）で規定されている利息の上限（法定利率の2倍）は、法人間の契約、社債又は有価証券による取引、金融機関との契約などには適用されないことを規定した。

3. 精神的損害賠償請求のインフレ調整

高等労働裁判所（Tribunal Superior do Trabalho：TST）の裁判例（見解）の統一を図る機関である個別紛争専門部は、2024年6月に、合憲性直接訴訟58号（ADC58）における連邦最高裁判所（STF）の見解に基づき、精神的損害（慰謝料）が認められた場合の賠償額のインフレ調整を、訴訟提起時に遡って政策金利（SELIC）により行うことを決定した。高等労働裁判所の部によって、賠償額が確定した時からインフレ調整すべきとする見解と訴訟提起時に遡ってインフレ調整すべきとする見解の相違があったため、個別紛争専門部が判断の統一を図った。

この決定により、インフレ調整の起算日が早まることになるため、企業に財務的なインパクトを与える。

4. 1980年代の労働債権のインフレ調整

高等労働裁判所第7部は2024年6月、労働債権のインフレ調整の方法について新たな判断を示した。この判断も上述の合憲性直接訴訟58号（ADC58）における連邦最高裁判所の見解に適合させる目的で示されたものである。高等労働裁判所の本見解のもととなった事件は1980年代に争われた労働債権に関して1989年に提起された集団訴訟である。同集団訴訟は2010年に雇用主側の敗訴で終結したが、その後執行の段階でインフレ調整の方法を巡って労働者が個別の訴訟を提起した。これに対して、高等労働裁判所は、インフレ調整に適用される指標について、裁判前の段階、1989年の集団訴訟提起時点、1995年法9065号が施行された以降と3段階に分けて異なる指標を用いてインフレ調整することを示した。

サードパーティに起因するESGリスクのマネジメントと企業責任における課題



天野義仁
(KPMG ブラジル
ジャパンデスク
責任者)



佐々木健文
(KPMG ブラジル
ジャパンデスク
マネージャー)



Honda, Kin
(KPMG ブラジル
ディレクター)

現代のビジネスにおいて、多くの企業は社会、環境及び企業責任の問題に対する透明性、及び信頼性の向上を重要課題として捉えている。株主、規制当局、消費者を含めたステークホルダーからのESG推進、人権侵害の撲滅や各種法令の遵守に対する期待は日に日に増しており、企業はこれらの声に応えるための対応にコミットすることが求められている。

近年、製品の偽装、労働搾取や劣悪な労働環境、森林伐採や環境破壊を伴った製品の販売に関する事件の発覚が相次いでおり、これらの事件はサードパーティの利用における透明性、信頼性、トレーサビリティ、責任の明確化、モニタリング等の確保及び遂行並びにサプライチェーン全体における倫理的かつ持続可能なプラクティスを浸透することの重要性を示している。本記事では、こうしたサードパーティ由来のリスクとその対応策について説明したい。

サードパーティとリスクマネジメント

リスクマネジメントにおいて企業が考慮すべきサードパーティは、生産活動に必要な原材料を供給するサプライヤーのみならず、製造委託先、物流業者、販売代理店や製造設備ベンダー等、バリューチェーンの維持において関係する事業者のほか、ITベンダーや弁護士等、社内の管理機能の一部を委託する事業者も含まれる。

これらのサードパーティは企業の効率的な運営において必要不可欠なパートナーであると共に、企業により適切なマネジメントがなされていない場合、大きなリスク要因を生み出す可能性がある。企業は、自社のオペレーションのみならずサプライチェーン全体に責任を負うことが求められており、上述で示したような事件は、たとえサードパーティの活動に起因するものであったとしても、企業に責任があると見なされる可能性がある。そのことから、サードパーティの活動の把握及び適切な基準に則ったリスクマネジメントが以前にも増して重要となる。

KPMGがブラジルを含めた16カ国のマネジメント1,263人を対象に実施した「サードパーティリスク管理の展望」2022年3月版では、インタビュー対象者の77%が過去3年間にサードパーティに起因する重大なアクシデントに少なくとも1度は見舞われたと回答しており、そのアクシデントの結果として生産停止、行政処分、罰金、財務上の損失又は評判の失墜等が生じたと答えている。

さらに、ESG部門、調達部門やコンプライアンス部門の責任者らは、現在直面している主な課題として、サプライチェーンで何が起きているのかが見えづらい点や、サードパーティが企業が求める倫理基準及びサステナビリティ基準を満たしているかどうかの保証が無いことを挙げている。

サードパーティに起因するESGリスクとそのマネジメントについて

サードパーティに起因するESGリスクとして、サードパーティのオペレーションにおける強制労働又は児童労働、安全基準を満たさない劣悪な労働環境、違法地域で生産された農産物や資材の使用、

カーボנקレジットに関連する不正行為、法令上求められる許認可の欠如といった問題が挙げられる。

これらの課題に対して適切に対処するためには、下記の要素を含めた戦略的なアプローチを取り入れる必要があると考えられる：

- ステークホルダーとの協力関係の構築
- リスクモニタリングを効率的に遂行するためのテクノロジーの導入
- 透明性を確保し、規制変更又は市場の変化に対して迅速に対応可能なポリシー及びプラクティスの制定

上述の要素を含めたアプローチが適切に運用されるためには、自社のリスク管理部門において、サードパーティのリスク調査及びデューデリジェンスから契約終了に至るまでの継続的なモニタリングまでのプロセスに対する管理体制を構築することが重要である。効果的な管理体制の構築には一般的に次のステップが考えられる：

- I. 管理対象とするサードパーティ及びそのリスクを特定
- II. 現状のリスク管理をインタビュー並びに資料分析により把握し、ベストプラクティスと比較したギャップ分析を実施
- III. 管理体制の整備及び改善するために必要となる人材、スキル、規程及びテクノロジーを検討及び導入

他国のESG規制動向とブラジルでのビジネスへの影響

ブラジルにおいてサードパーティの観点からESGに係るコンプライアンスを規制する法令は成立していないものの、ESGに係る法令に関して施行が先行している欧州連合を参考とすることが多い。同地域における規制動向を把握することは、将来的なブラジルのESG関連のコンプライアンス規制を予測する上での参考となりうる。また、欧州連合へ直接的に輸出していない在伯日系企業でも、同地域への輸出を行っているサプライチェーンに組み込まれている場合、一部規制の対象となる可能性があるため留意が必要である。

最後に

ESGリスクのマネジメントにおいては、本記事で触れたように、自社のみならずサードパーティを含めたサプライチェーンにおける生産活動、物流及び法令のコンプライアンス等、事業活動における様々な領域から発生するリスクを管理する必要がある。

サードパーティに起因するESGリスクはブラジルにおいても年々その注目されつつあり、近年において発生したサードパーティに起因する事件により企業が被った財務上の損失及びレピュテーション低下は、こうしたリスクに対するマネジメントの重要性を物語っている。他方、ESGリスクに対して適切な管理体制を整備している企業は、社会及び環境への貢献のみならず、ESG要素を重要視する消費者に対するブランド力向上及び投資判断にESG要素を取り入れる投資家の呼び込みに繋がっており、競争上の優位性の確保に一役を買っている。ブラジルで活動する企業においては、リスクの顕在を抑止する視点だけでなく、事業成長の一助の視点としてESGリスクへの対応を検討することが重要と言えるだろう。

浮力の国ブラジル



布施直佐
〔「ピンドラマ」誌編集長〕

21 世紀の日系移民

今年の5月から、筆者が編集するブラジル在住の日本人向けのフリーペーパー「ピンドラマ」で「21 世紀の日系移民」と題したインタビュー記事の連載を始めた。2001 年以降にブラジルに移り住んだ比較的若い世代の人たちが何を求めてブラジルに来て、現在どのような生を送っているかを筆者自身が知りたいと思ったためだ。まだ4 名（全て女性）にしか話を聞いていないが、彼女らが皆自分がやりたいと思っていたこと・ブラジル音楽の演奏家、芸術家、サンバダンサー、ヨガ講師になること・を実現していることに驚くと同時に「やっぱりな」とも思った。それは筆者が19 年前にブラジルに移住してから常に感じていた、ブラジルという土地が持つ「浮力」の存在を裏付けてくれたからだ。

ブラジルの「浮力」

移住する1 年前に初めてサンパウロのグアルーリョス空港に降り立った時に心身共に感じた軽さ、「あれっ、何か身軽になったな」という感覚は今でも覚えている。1 か月の滞在中その身軽さはずっと続き、ブラジル移住を決める最大の要因となった。移住後の生活もこの「浮力」のおかげで色んな面で助けられた。このブラジルの「浮力」を説明するには「重力」の国日本と比較するのがわかりやすいだろう。

「重力」の国日本

これから記す内容は筆者が生まれてから40 年間日本（東京都）で暮らしていた時に実感し、また何度か帰国した際にも再認識したことだが、あくまでも個人的な見解で「これが日本の真実の姿だ！」と強く主張するつもりはない。

1. 「視線」から受ける圧力

日本では街中を歩いていても、電車に乗っていてもお互いを無意識に監視することが身体化されている。常に社会のコード（共通規範）から逸脱していないかお互いにチェックし合っているのだ。

ブラジルには共通の社会規範がほとんどなく、「自分は自分、他人は他人」という考えが徹底しているので、街中で人の視線を感じることはほとんどない。小さなことのようにだが、これがどんなに気持ちを軽くしてくれることか。

2. 「個」と「社会」

日本では「個」よりも自分が属する「集団」を優先するよう子どもの時から叩き込まれる。「個」の幸せは「集団」の繁栄の下に常に置かれる。

ブラジルでは「個」の幸せを追求することが最優先され、「集

団」のために「個」を犠牲にするという発想自体がない。例えば、家庭の事情で仕事を休む場合も日本のように罪悪感を感じたり、感じさせたりすることはほとんどない。

3. 労働時間の質

日本では勤務時間内は常に何か仕事をしていなければならない。与えられた仕事が終わっても、自分で何かやることを探すか仕事をしているふりをしなければならないのだ。ブラジルでは勤務時間中でもやることがなければ従業員同士で会話したり、休憩するのが当たり前だ。1 日の一番活動的な時間を労働に100% 費やすのと（それが通常40 年くらい続く）、労働している間も人間的なゆとりを持って過ごす人生とどちらが豊かだろうか。2 年前帰国した時、地下鉄の改札に駅員が立ち、乗客一人一人に「お疲れ様、お疲れ様」と声をかけているのを見た時は絶句した。

4. 同調圧力

今まで散々言われ尽くしたことだが、日本は個性を主張するよりもまわりに同調することを強く求められる社会だ。日本人は生まれた時から死ぬまで「日本人養成ギブス」を付けて生きねばならない。その結果均質で安定した社会が営まれるが、「ギブス」で締め付けられた人生は窮屈なことこの上ない。

ブラジルは色んな人種が共存する「移民の国」なのでモデルとなる「ブラジル人像」など成立不可能だ。皆てんでばらばらに言いたいことを言い、したいことをして生きている。日本のように安定した社会は望みようもないが、穴だらけの社会の方が風通しが良くて生きやすいと筆者は実感する。

5. 「今」を生活しているか

日本人は「良い大学に入るために」小学生の時から何年間も受験勉強を続け、「老後のために」収入の大半を貯金にまわす等、「未来」のために「今」を犠牲にすることが良しとされる。その結果、「今」を本当に生きることができていないのではないか。

ブラジル人は「未来」のことを考えるのは苦手で、「今」したいこと、「今」楽しめることをとにかくやろうとする。人生は結局「今」にしかないのだから、「今」に集中し「今」を豊かに生きる方が充実した人生だと筆者は強く思う。

ブラジルへの誘い

最後に上述の「21 世紀の日系移民」第4 回に登場した女性の言葉を記す。

「日本社会で窮屈な思いをしている人は一週間で良いからとりあえず来てみれば良い。そうすれば日本社会で当たり前のことが実は当たり前ではないことが見えるはず。情報社会の中、他人と比べて劣等感を持ってしまっている人も、ブラジルではあるがままの自分を肯定できるようになり、ただ生きているだけで幸せだと思えるでしょう」（ヨガ講師の鈴木友紀菜さん、36 歳）。



パリ五輪 ～ブラジル選手の活躍～



全体として、女性パワーが歴然

パリ五輪でブラジルが獲得したメダル数は総計20 個（金メダル3、銀メダル7、銅メダル10）であったが、男女別でみると、女性12、男性7、混合1、となっており、三つの金メダルはすべて女性によるもの、種目別でみると、体操女子ゆか（レベッカ・アンドラーデ）、柔道78kg 級（ベアトリス・ソウザ）、ビーチバレー（アナ・パトリシア&デュダ）、であった。今回のブラジル勢の活躍は女性パワーに支えられた。

象徴的な例がサッカーだ。前回の東京大会では、決勝戦でスペインを下して金メダルを獲得したブラジル男子チームだったが、今回は、南米予選の段階で敗退し、パリ五輪に参加すらできなかった。一方、女子チームは、決勝戦で惜しくも米国に負けてしまったが、激戦を勝ち抜いて銀メダルを手にした。また女子バレーも3 位決定戦でトルコを打ち負かし銅メダルを獲得した。

体操女子を牽引したレベッカ・アンドラーデ

東京大会では新星であったレベッカ・アンドラーデは、二つのメダル（個人総合で銀メダル、跳馬で金メダル）を獲得して注目を浴びたが、今回のパリでの活躍は東京を遥かに凌駕する素晴らしいものであった。女子個人総合では銀メダル、団体総合で銅メダル、ゆかで金メダル、跳馬で銀メダルと4 つのメダルを獲得したが、米国のシモン・バイルスとの

好対決に世界中のファンが惜しめない拍手を送ったのであった。オリンピック体操競技において三人の黒人選手（レベッカ+シモン+ジョーダン・チャイルズ）が表彰台を独占したのは史上初めてで、この感動的シーンを掲載したX の五輪公式ページの表示回数は2,600 万だった。

柔道でもまずまずの健闘

女子78kg 級で金メダル（B. ソウザ）、男子66kg 級で銀メダル（W. リマ）、女子52kg 級で銅メダル、混合団体で銅メダルと柔道部門では4 つのメダルを獲得した。

男子の活躍

銀メダルは、20km 競歩のカイオ・ボンフィン、柔道66kg 級のW. リマ（阿部一二三に負けた）、カヌー男子1,000m のイザキアス・ケイロス（5 つ目のメダル）。銅メダルでは、スケートパークのアウグスト・アキオ、サーフィンのG. メディーナなど。

前回の東京大会との比較

東京五輪でブラジルが獲得したメダル数は、金7、銀6、銅6、計21 個で、これがオリンピックにおいてブラジルが獲得したメダルの数ではベストであった。今回のパリ大会の結果は、この東京での記録に次ぐもので、「まずまず健闘した」と評価できるだろう。

キャンパス・コラム

私のブラジルとの出会い

加藤七海（元ブラジル留学生）

13 年前、私が小学6 年生の時にブラジル人との交流で感じた衝撃的な魅力を、私はいまだに言語化できていない。当時自分が所属していた子ども合唱団で、ブラジル訪日団の歓迎演奏をした時のことである。頻りに訪日外国人に歓迎演奏をする機会はあったが、その日は私にとって格別な思い出となった。

いつものように舞台用の衣装を着て、演奏のリハーサルをし、一人一人が迎え入れるための国旗やウェルカムボードなど小道具を手を持った。小学6 年生という年齢だった私は、その小道具の数が足りず、自分が手拍子で迎えることがとても不服であった。もちろん今考えると仕方ないことなのだが、当時はそれが大問題であった。不満を抱えつつ歓迎演奏を終えた私に、一人のブラジル人女性が私にブラジルの国旗を貸してくれた。自分も小道具を持って歓迎ができる嬉しさもあったが、何よりもたった一人のために心を使ってくれた真心が嬉しかった。歓迎会が終了した後、旗を返そうと彼女に話しかけると、「É para você」と私にその旗をくれた。会が終了しても終わらない彼女たちの歌とダンスに、私は何とも言えない魅力を感じた。心からブラジルを訪れたい

と思った。

それから彼女にどうしてもお礼を伝えたいと思った私は、ありとあらゆる大人の力を借りて、数年越しに彼女に手紙を書き送った。そこから彼女とは文通をするようになり、お返事をくれる度、ブラジルを訪れたいとの思いはより濃くなっていった。

大学生になった私は、交換留学でブラジルに行くことを決めた。面接時にその動機を話すことはとても困難だったが、研究分野とうまく絡み合わせ、ついにブラジルに行くことができた。そして、リオデジャネイロに住む彼女と再会を果たすこともできた。カーニバルの間は彼女の家でお世話になったが、約10 日間彼女の家族と過ごした時間は、ブラジルの魅力を再認識し、さらに没入するには十分な時間だった。

ブラジルへの留学経験を話すと、ブラジルの何に惹かれたのかを聞かれることがよくある。何年たっても、最初に彼女と出会ったときに感じた魅力を上手く人に伝えることはできていない。しかしあの日に感じたブラジルの魅力をより多くの人に知ってもらえるよう、私自身もより多くのブラジルの魅力に触れていきたいと思う。

追悼：版画家ジョゼ・フランシスコ・ボルジェス(1935～2024)



Foto: Ed Machado / Arquivo Folha de Pernambuco

「ブラジルの棟方志功」のローカルを越えた普遍的魅力

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

2024年7月26日、訃報

ブラジル北東部のペルナンブーコ州ベゼーホス市で生まれ育った、ブラジル版人間国宝として国際的に著名な詩人・木版画家ジョゼ・フランシスコ・ボルジェスが、7月26日亡くなった。老衰からくる多臓器不全であった由だ。享年88。

ペルナンブーコ州の地元紙（ディアリオ・デ・ペルナンブーコ、ジョルナル・ド・コメルシオなど）はもちろんブラジルの主要紙（フォリャ・デ・サンパウロ、エスタド・デ・サンパウロ、グローボなど）も長文の追悼記事を掲載し、彼のフォークアート作品の大衆性と国際的普遍性を詳しく解説していた。代表的なTVグローボのニュース番組ジョルナル・ナシオナルでは、10分以上の時間をあてて、同局が以前放映した特集番組を編集した映像を再放送しながら、ノルデスチの生んだ偉大なアーティストを追悼していた。



▼フォークを踊る人々

ルーラ大統領の弔文

同じペルナンブーコ出身であることもあって”同郷の友”として親交のあったルーラ大統領はSNSに追悼文をアップしたので、それを訳してみよう。

「本日（7月26日）、私たちはブラジルの誇る偉大な木版画家ジョゼ・フランシスコ・ボルジェス、通称J・ボルジェス、とお別れをすることになった。独学で版画アートを学んだボルジェスは、ペルナンブーコ州のアグレスチで子供の時から働き始めた苦労人であった。彼のアート作品をローマ法王に私自身が手渡すことができたことは本当に幸せであった。ボルジェス家の方々、友人の方々、我が国の偉大なアーティストのファンの方々へ、哀悼の意を表します。」

改めて、J・ボルジェスとは

通称J・Borges（ジョッタ・ボルジェス）で知られた彼は、1935年、貧しい農民の息子としてベゼーホスで生まれた。自活のため子供時代から農地で働き、木工所で働いていた10歳の時は、木製のお玉（しゃもじ）を自分で作って朝市で売ったり、サトウキビ工場でも工事現場でも働きづめの勤労少年であった。学校は12歳の時10か月ほど通っただけで、読み書きも算数も独学



で身につけ、自ら詩を詠むようになった青年時代、コルデル文学（中世のヨーロッパで広く行われていた口承文学がポルトガル経由でノルデスチに持ち込まれたもので、紐でつるして売られた大衆韻文冊子文学）に出会うことになって、彼のアーティスト魂が目覚めることになる。

▼セルタネージョ(内陸部住民)の引越



1955年、彼が20歳の時、最初のコルデル冊子を発行することになるが、本来は、韻文を書く詩人とイラスト版画（表紙・裏表紙）を描く画家は別なのだが、画家を雇うオカネもなかったため、自分で彫刻刀を握って表紙イラストも手がけた。この金欠病のおかげで、詩人にして木版画家というアーティストが”強制されて”誕生した年となった。1960年代から80年代にかけて、彼のアーティストとしての活躍はコルデル文学の範疇を越えていき、有名作家（劇作家アリアーノ・スアスーナ、ウルグアイ作家エドゥアルド・ガレーアノ、ポルトガルのノーベル賞作家ジョゼ・サラマゴほか）の著書の表紙イラストを手掛け、さらにはTVノヴェーラのオープニング・イラスト（1985年大ヒットしたグローボの連続テレビ小説“Roque Santeiro”など）も手がけたことで全国的に知名度がアップ、さらに2002年の国連カレンダーにも作品を提供している。昨年2023年には、ルーラ大統領のローマ法王訪問の際、キリストと聖母マリアを描いたボルジェスの大作を寄贈し、話題となった。

ピカソ・北斎そしてボルジェス・ジュニア

2002年3月27日に掲載されたニューヨークタイムズの長文ルポ記事では、ボルジェスを「大衆文化の天才」にしてパブロ・ピカソに比するフォーク（民俗）アートの巨匠、と紹介し、さらに葛飾北斎との類似点まで言及していたが、筆者としては、北斎よりも「ブラジルの棟方志功」といったほうがわかりやすいと考えている。

周知の如く、棟方の学歴は尋常小学校卒で油絵も版画も独学で学び、独自の木版画芸術世界を構築したが、ボルジェスも独学でポルトガル語も版画も学び、世界的に知られるアート作品群を制作した。能弁ではなかった棟方は津軽弁で訥々と語り、ボルジェスはノルデスチ方言による口承文学の語り手でもあった。

ボルジェスには、18人の息子・娘がいるが、17番目のパブロが父親の仕事を引き継いで木版画家として活躍中である。コロリーダス峠の山本康子さんが、2019年11月、パブロを日本に招待して、東京で木版画ワークショップを行ったが、この時参加した筆者はパブロと30分以上フリーな会話を交わすことができた。手先の器用な版画家でありながら、会話コミュニケーション能力も高いナイスガイで、ボルジェス・ジュニアとして新しい境地を切り開いていくものと期待している。

▼コルデル詩を朗読する人々▼

SAUDADE DO BRASIL

43年間南米一筋!ブラジル専門の旅行会社(株)アルファインテル

ブラジルへのご旅行・出張は創業1979年のアルファインテルにお任せください。

新型コロナウィルスの世界的な流行により、海外旅行に行くのは難しい状況が続いています。海外旅行に対する考え方も変わり、より安心・安全が求められるようになりました。

コロナ禍でも、アルファインテルは南米系旅行会社で唯一のIATA(国際航空運送協会)公認代理店として、主に在留ブラジル人の皆様にブラジル行きの航空券を手配し続けている実績があります。

ご出発前に必要なPCR検査・陰性証明書の様式やワクチンパスポートなど、各国の要件も最新情報にてご案内し、より安心・安全な旅をご提供します。

主要取扱航空会社:ルフトハンザドイツ航空、カタール航空、エミレーツ航空、エールフランス航空、KLMオランダ航空、ラタム航空、アメリカン航空、ユナイテッド航空、デルタ航空、トルコ航空、イベリア航空、ゴル航空他

航空券のほか、現地のホテル、車両、ガイドの手配も実績ある弊社にご用命ください。

お客様のお声

2007年よりアルファインテルさんとブラジル音楽好きに特化したブラジルツアーを開催しています。なかでも2010年度のジョアン・ジルベルト&ルイス・ゴンザガの故郷訪問ツアーは思い出深いです。案内してくれた現地ブラジル人ガイドさんも「こんな所に来たの初めて!」と写真を撮りまくるほどでした(笑)。入手困難なイヴェッチ・サンガロのコンサートチケットを人数分確保していただいたことにも感謝しています。コロナが収束したらまた再開しましょう!引き続きよろしく願います!

Willie Whopper氏
(Barzinho Aparecidaオーナー)

ブラジルへ帰国する際は必ず利用させていただいています。乗り継ぎ便に間に合わないトラブルなど、いざという時にブラジル現地でも相談できるので、安心してブラジルへ行けます。また、ブラジル観光地のことを知り尽くしたスタッフが旅行プランを提案してくださるので、はじめての方でも失敗しない最高のブラジル旅行を楽しむことができます。

平野勇パウロ氏
(株)アルファインテル
代表取締役

僕が海外を旅するようになったのは25年くらい前。月日が経ち今は毎年のようにブラジルに行く生活になりました。治安状況の変化や新型コロナのような感染症が流行ったりしたとき、旅のアマチュアである僕らには知りようがない正確な現地情報や、危険を避けるノウハウが旅行会社にはあって、航空券をそこで買うということは、旅が終わる日本の土地を踏むまで見守ってもらっている、という安心感があることに気がつきました。旅の目的や希望実現のためのプランも一緒に考えてくれます。安心して旅の準備で実は一番大切なポイントです。アルファインテルさんの細やかな対応や気遣いが本当に助かります。

宮澤摩周氏
(パーカッションスト・Quer Swingar Vem Pra Cá代表)

観光庁長官登録旅行業 第1835号

東京都港区西新橋1-20-10 西新橋エクセルビル7階

株式会社アルファインテル

電話: 03-5473-0541

e-mail: info@alfainter.co.jp

Accredited
Agent

photo by Junko Sekine



水泳・競泳
HIROKO
MAKINO

マラソン
YUKI
KAWAUCHI

スキー・ジャンプ
RIKO
SAKURAI

CHALLENGE

パラ水泳
CHIKAKO
ONO

パラ陸上(やり投げ)
TAKUYA
SHIRAMASA

車いすバスケットボール
AMANE
YANAGIMOTO

車いすバスケットボール
KEI
AKITA

ワクワクするような挑戦を

あいおいニッセイ同和損害保険は、挑戦するアスリートとともに成長していきたいという想いのもと、
全社員が一丸となって、スポーツ支援を行っています。

立ちどまらない保険。

MS&AD あいおいニッセイ同和損保

CAFÉ
FAZENDA
ALIANÇA
SPECIALTY COFFEE
SINGLE ORIGIN



Encantando os paladares mais exigentes
O café produzido no município de São João da Boa Vista que fica na região centro-leste de São Paulo, pelo empresário Renato Ishikawa, é cuidadosamente elaborado a partir de grão 100% arábica, selecionado a cada lote e possui certificados internacionais de qualidade (Rain Forest Alliance e UTZ), e além disso, preocupado com a proteção ambiental, preserva 30% da mata virgem onde a exigência legal é de 20%.

コーヒーを愛する人への極上の一時
サン・ジョアン・ダ・ボア・ヴィスタ市（サンパウロ州の中央部）で、日系実業家石川レナト氏の農園で生産されたコーヒーは、ロットごとに選別された100%アラビカ豆から丁寧に作られており、厳しい国際的品質証明書（レインフォレスト・アライアンスとUTZ）を取得しています。さらに、環境保護法でコーヒー農園に課せられている20%の森林保全に対し、30%を保全し、環境にも配慮しています。

日本代理店
ミカド珈琲店 日本橋本店
ミカドコーヒー 日本橋室町三井タワー店
ミカドコーヒー 軽井沢旧道店
ミカドコーヒー 軽井沢 プリンスショッピングプラザ店
ミカドコーヒー 軽井沢ツルヤ店(スーパーツルヤ軽井沢店)
株式会社ミカド珈琲商会
サザコーヒー筑波大学アリアンサ店
オンラインストア<https://mikado-coffee.com>

住所
東京都中央区日本橋室町1-6-7
東京都中央区日本橋室町3-2-1, 日本橋室町三井タワー5階CAFE & BIZエリア
長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢786-2
長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢1178-798
長野県北佐久郡軽井沢町長倉2707
東京都港区三田2-21-8
茨城県つくば市天久保3丁目1

ブラジル・サンパウロでお住まいをお探しでしたら
コジロー出版不動産部にお任せください

日系進出企業の駐在員が多数住むサンパウロ市パライズ地区の
優良アパートをご紹介します。

内覧からオーナーとの交渉、契約書締結、お部屋のリフォーム
家具の購入、入居手続きの立ち会いまで全て日本語でサポートいたします。

フラットホテルの手配も行っております。

ブラジルへ渡航される前にお気軽にお問い合わせください。

↓ お問い合わせ（日本語どうぞ）



+55 (11) 99478-2433



ed.kojiro@gmail.com

担当 布施直佐（不動産仲介業者）
不動産業者協会登録番号 (CRECI)
258600-F

物件の写真はこちらでご覧になれます → https://note.com/pindorama_re | [@pindorama.real.estate](https://www.instagram.com/pindorama.real.estate)



Leading You Forward

充実の体制で中南米に関する高品質なリーガルサービスを提供

中南米における豊富な駐在経験と現地事務所との密接なネットワーク

西村あさひ法律事務所は、世界18拠点で750名を超える国内外の弁護士が緊密に連携し、最高レベルのリーガルサービスをワンストップで提供する日本最大の国際的総合法律事務所です。ブラジル、メキシコ、アルゼンチンをはじめとする中南米各国での駐在経験がある弁護士を含む中南米プラクティスグループを設け、ノウハウや情報の蓄積に努めております。また、中南米の主要な国の多くの有力法律事務所との間で人材交流も含めた強固な関係を構築しているほか、Lex Mundi等の国際的な法律事務所ネットワークを活用し、中南米のほとんどの国において有力な現地法律事務所と関係を有しています。

東京およびニューヨークから有機的にサポート

西村あさひ法律事務所の東京事務所には、中南米の法務について豊富な経験を有する弁護士が多数在籍し、日本企業の皆様の中南米における事業展開をご支援しています。また、ニューヨーク事務所(Nishimura & Asahi NY LLP)においても中南米に駐在経験がある弁護士が常駐し、東京事務所とニューヨーク事務所の各弁護士が有機的に連携することで、日本と中南米の地理的な距離や時差のギャップを埋めつつクライアントの皆様に万全のサポートをご提供しています。

お問い合わせ

latinamerica@eml.nishimura.com

東京事務所 中南米担当: 清水誠、古梶順也
ニューヨーク事務所 中南米担当: 山口勝之、梅田賢

NISHIMURA & ASAHI

西村あさひ法律事務所の中南米プラクティスに関する弁護士等、主な案件実績、関連する論文/セミナー等については、以下よりご覧ください。



ブラジル



www.nishimura.com

Churrascaria
Que Bom!
www.que-bom.com

Produzido pela
ATHLETA®

LOJA ASAKUSA
TEL: 03-5826-1538
TOKYO-TO TAITO-KU
NISHI ASAKUSA 2-15-13 Nikkoshi B1F

LOJA SHIMBASHI
TEL: 03-6402-5685
TOKYO-TO MINATO-KU
SHIMBASHI 4-1-1 SHINTORA CORE 2F

Tokyo Nagoya Osaka Fukuoka Bangkok Beijing Shanghai Dubai Frankfurt Düsseldorf
Hanoi Ho Chi Minh City Jakarta*1 Kuala Lumpur*1 New York Singapore Taipei Yangon

*1 Associate office

360° business innovation.



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

鉄道と港湾を一体化させ、物流を効率化。

鉄道網と港湾ターミナルの複合一貫サービスを提供するVLI社に出資参画。
たとえばサントス北西のティブラム港で、取扱貨物を次々と拡大。

[Business innovation-2]

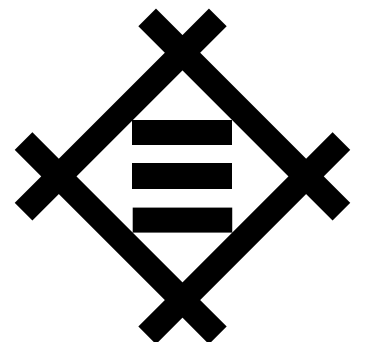
現場のニーズに細やかに応える農薬事業で、農業の発展を。

オウロフィーノ社に出資参画。大規模な農地が多いブラジルで、
気候条件に適した農薬製剤を開発。作物の順調な生育を農薬で支え、増産や品質向上に貢献。

[Business innovation-3]

自動車リースで、社会をもっと便利に、もっと豊かに。

中南米最大の自動車市場ブラジルで、トヨタと共に B to B 向けリース事業“KINTO”を展開。
カスタマイズ自在のサービスで、社会全体の「保有」から「利用」という動きに応える。



世界の未来を、世界とつくる。三井物産

MITSUMI & CO.